
巨人たちの戦争 第1部：崩壊

伊藤 薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

巨人たちの戦争 第1部：崩壊

【Nコード】

N1446T

【作者名】

伊藤 薫

【あらすじ】

1941年6月22日、戦いの火蓋は突如として落とされた。ドイツ国防軍が、ソヴィエト連邦へと侵略を開始したのである。ドイツ快速装甲部隊が狙うは、「赤い首都」モスクワ。待ち受けるソ連軍は、「電撃戦」の異名を取るドイツ軍の奇襲を前になす術もなく、無残な敗北を続けた。本作は、両軍の作戦行動、指導者・将軍たちの思惑に焦点を当て、「独ソ戦」を克明に再現したノンフィクションである。

はじめに・・・

死者だけが戦争の終わりを見ている

プラトン

その昔、画家を志していたオーストリア出身の伍長―アドルフ・ヒトラーはいつしか、世界の全てを支配しようと思うようになった。彼は国民や軍隊を奮い立たせ、自らが支配するだろう世界を「第三帝国」と名付け、その帝国は千年以上も栄えると説いた。彼は力強く宣言した。

「地理の学習は一言でこと足りる。帝国の首都はベルリンである」
1939年、未曾有の世界大戦の火蓋は切って落とされた。ドイツ国防軍の「電撃戦」を目の当たりにして、ポーランド、東欧・北欧諸国、ベルギー、オランダ、ルクセンブルク、大国フランスも侵略され、占領された。

1941年に始まった「独ソ戦」は、あくまでもこの未曾有の世界大戦の一部分でしかない。しかし、「独ソ戦」がドイツにもたらしたものは、ドイツひいては「第三帝国」の崩壊と滅亡であった。東部戦線の規模の大きさは、歴史上に残されているあらゆる戦いの規模を超越している。終戦までのドイツ国防軍全体の損失は134万8000人を数え、そのうち1075万8000人が東部戦線で戦死または捕虜にされた。これはドイツ国防軍全兵力の75%を占めており、対してソ連はその2倍以上の2819万9127人が戦死または負傷した。

第一次世界大戦は国体の全てをなげうつという壮絶な様相から、「総力戦」という言葉で表現された。第二次世界大戦もまた「総力戦」であったが、この言葉が示せているのは「東部戦線」のみだと私は考える。「西部戦線」における転機は、ノルマンディー上陸という二次戦線の形成まで待たなければならなかった。それまでにソ

連軍は「鼠たちの戦争」と呼ばれたスターリングラードの凄惨な市街戦で一気に反攻をはじめ、クルスク戦車戦では完璧な勝利を収めた。

ソヴィエト連邦がフィンランドとの「冬戦争」で惨めな敗北を喫した頃、世界各国はかつてのロシア帝国ほどの脅威を感じなくなつた。しかし、「東部戦線」における勝利はその認識を完全に崩壊させた。後の「西側諸国」はバイエルン地方でナチスが再建されるという誤った認識のために、ソ連にベルリン陥落という大命を任せてしまった。英首相チャーチルはこの判断を下したアイゼンハワーに失望したが、アメリカ大統領ルーズベルトは目先の目標ではなく、「国際連合」という至上目標を意識していた。この目標のためなら、ソ連軍が奪回した東欧諸国の犠牲は止むを得まいと考えていた。高貴な目標には、かならず犠牲がつきまとう。

この判断が招いたのはドイツの分裂であり、資本主義と社会主義の深い対立であつた。アイゼンハワーは後に大統領になった時、ソ連にベルリン陥落を任せたのは間違いであつたと、当時の西ベルリン市長―後の西ドイツ首相―ウィリー・ブランドに話していた。

「東部戦線」はドイツ「第三帝国」の崩壊を招き、最後は「冷戦」という以後半世紀にわたる世界を二分する大きな対立構造を招いた。この書で描かれるのは、「冷戦」を引き起こした独ソ両国の国体の全てをなげうつ「総力戦」の実像である。

用語解説（前書き）

一応、本作を読むに当たって必要なものは書きました。場合によっては、随時ふやしていきます。

用語解説

○ソ連（ソヴィエト）軍

1918年に創設。以来、正式名称は「労農赤軍」。「ソ連軍」という名称は1946年以降から使われ始めるが、内外では「ソ連軍」という名称は広く使われていた。本作では、「赤軍」と「ソ連軍」が出てくるが、特に意味があって使い分けてはいない。ソ連の「軍」は、ドイツの「軍団」に規模が相当する。

○国防軍

1935年に創設。ドイツ正規軍の正式名称。1940年からは、武装SSも建前上はその指揮下に加わる。将校、特に参謀部には爵位を持つ旧プロイセン系の貴族出身者が多い。本作では、指揮官名に貴族を表す「フォン」は省略している。

○正面軍&軍集団

ソ連では、野戦軍3〜4ないし8〜9個、戦車軍1〜3個、航空軍1〜2個その他を統轄する総合司令部が置かれた。これが「正面軍」である。ドイツで「正面軍」に対応するのが「軍集団」であり、野戦軍2〜4個、装甲軍1〜2個その他で編成された。文献によっては、指揮官名に「○○装甲兵大将」「○○歩兵大将」と書かれているが、本作では省略している。

○戦車&装甲（部隊）

どちらも独ソ両国の戦車を中核とした部隊のこと。本作では、ソ連軍を「戦車」、ドイツ軍を「装甲」と使い分けている。ちなみに日・米軍には「機甲」（部隊）があるが、同様の部隊を指している。

○狙撃&歩兵（部隊）

どちらも独ソ両国の歩兵部隊のこと。本作では、独ソ両国を区別するという意味で、ソ連軍を「狙撃」と使い分けているが、スナイパーだけの部隊という意味ではない。

○親衛

ソ連では1941年9月から、特に功績を挙げた4個師団に「親衛師団」の名称を付与したのが始まり。一般の師団に比べ、給与、弾薬の支給が格上げされている。

○親衛隊

1925年に創設。ヒトラーの私兵集団である「突撃隊（SA）」の中から生まれた準軍隊組織。当時の長官は、ハインリヒ・ヒムラー。本作では全て「SS」と明記する。SSの武装部隊が、「武装SS」である。SSにも階級があり、文献によっては「OOSS大将」と書かれているが、本作では省略している。

○NKVD

「内務人民委員部」の略。当時の長官は、ラヴレンティ・ベリヤ。独自の軍隊組織を持ち、その前線警備歩兵連隊は各正面軍司令部に配属されるが、赤軍の指揮系統には入らず、スターリンとベリヤに直属する。

○打撃軍

文献によつては、「強襲軍」「突撃軍」と訳されるが、本作では全て「打撃軍」と明記する。ソ連では1941～42年の緒戦時に急ぎよ5個軍を創設した。一般の軍に比べ、戦車、砲兵、騎兵軍団などが増強されている。

○機動集団

文献によつては、「作戦集団」と訳されるが、本作では全て「機

動集団」と明記する。ソ連では特に1941～42年の緒戦時に、
数個狙撃師団や数個戦車師団を指揮官が直属で部隊として編成した。
規模は「軍」の半分。突破で開けられた穴を塞いだり、ある街を奪
回することが目的とされた。

兵器（ドイツ国防軍）（前書き）

代表的なものを取り上げました。必要があつたら、随時ふやしていきます。

兵器（ドイツ国防軍）

○？号戦車

1938年から、運用を開始。まずスペイン内戦で、I号戦車とともにテスト運用された。第2次世界大戦開始時のポーランド侵攻から主力として実戦投入された。主砲は、20mm機関砲。？号戦車、？号戦車の生産がある程度軌道に乗り始めると、II号戦車は偵察・連絡を主任務にするよう格下げされた。

○？号戦車

ドイツ装甲部隊の中核戦力として構想された戦車。初期は生産が遅々として進まなかったが、対仏戦のころから次第に数が増え、主力戦車となった。主砲は50mm砲であったが、対戦車能力は不十分とされ、主力戦車の任務を果たせないと考えられた。砲塔の直径が小さく、長砲身の75mm砲搭載が不可能であったため、改良も限界に達した。大戦中期には、IV号戦車に主力戦車の座を譲った。

○？号戦車

1939年から、運用を開始。主砲は当初、短砲身24口径75mm砲が搭載され、戦車部隊の中で火力支援任務にあたっていた。独ソ戦が始まると、長砲身43口径75mm砲が搭載された。こうして？号戦車は、？号戦車に代わる主力戦車となり、北アフリカ戦線においては大きな戦果を上げた。ドイツ戦車部隊のワークホース（使役馬）と呼ばれ、戦況が求めるさまざまな要求に応じるべく、車台を流用した多種多様な派生型を生み出した。

○シュトゥーカ

1935年から、運用を開始。正式名称はJu98（ユンカース

98)であり、「シュトウカ」とは急降下爆撃機を意味する「Sturzkampfflugzeug」(シュトウルツカンプフルークツォイク)の略。逆ガル式の翼が生み出す下方視界の良さと、安定した急降下性能のため、精密な爆撃を行うことが可能。急降下時にサイレンのような音を立てることから連合国側からは「悪魔のサイレン」の異名で恐れられた。

兵器（ソ連軍）（前書き）

代表的なものを取り上げました。必要があつたら、随時ふやしていきます。

兵器（ソ連軍）

○T34

1939年12月から、運用を開始。優れた傾斜装甲を持ち、比較的パワーのあるディーゼルエンジンと幅広の履帯を備えていた。初期型は76・2 mm 砲を装備しており、T-34/76と呼ばれる。1941年の緒戦時では、ドイツ軍兵士らはその丈夫な装甲、強力な砲、高い機動性に大きなショックを受けた。

○KV1

1939年から、運用を開始。「KV」は当時の国防相であったクリメンティ・ヴォロシーロフの略。主砲には76・2 mm 砲を搭載し、厚さ90 mm という重装甲を誇った。独ソ戦当初、ドイツ軍の戦車や対戦車砲から放たれる砲弾をことごとく跳ね返し、彼らをして「怪物」と言わしめた。その一方、機械の信頼性、品質の低さはきわめて深刻であった。

○KV2

1940年2月から、運用が開始されたKV1の後継戦車。火力支援戦車として構想され、主砲には152 mm 榴弾砲を装備し、そのため砲塔は人の背丈ほどの大きさがあった。装甲はさらに重くなり、前面110 mm、側面75 mm という破格のものだった。ドイツ軍からは「巨人（ギガント）」として恐れられたが、性能はさしてKV1と大差なかった。

○カチューシャ・ロケット砲

1941年から、運用を開始。世界最初の自走式多連装ロケットランチャーであり、制式名は「82 mm BM-8」および「132 mm BM-13」である。構造は非常にシンプルで、ロケット弾

を載せるための鉄レールを平行に並べ柵状にした発射機と、方向と射角を調整するための支持架で構成される。ロケット弾には一般に、無誘導で照準器はついていない。命中精度は期待できないため、大量のロケット弾を集中的に撃ち込むことでその欠点を補った。

「カチューシャ」はソ連軍の兵士たちの間で広まった名称。これに対し、ドイツ軍の兵士たちからは発射時に鳴り響く音がオルガンに似ていたことから、「スターリンのオルガン」と呼んだ。

1・断絶

1941年6月21日土曜日、ベルリンは素晴らしい夏の日差しに満ちた朝を迎えていた。ウンター・デン・リンデンに構えるソ連大使館では休日の和やかな雰囲気の中で、館員たちは仕事についていた。なぜなら、バルト海から黒海に至る国境付近にドイツ軍の大部隊が集結している件について、モロトフ外務大臣から駐独大使デカゾフあてに訓令が届けられていたからであった。その内容は、ドイツ外相に即時会見を申し入れて、「納得する説明」を要求するというものだった。

ベレシコフ一等書記官兼首席通訳官は会合の手配をすべく、ヴィヘルム通りのドイツ外務省に連絡を入れた。しかし、外務省は「リッベントロップ外務大臣は不在で連絡がつかない」と一点張りだった。

時が過ぎるにつれて、モスクワからは情報をよこせとの催促が絶えなくなった。これまで同盟諸国から80回以上の警告を受けた上に、ドイツの意図を示す証拠がますます増えるにつれて、クレムリンはヒステリーに似た焦燥感に陥っていた。NKVDの長官代理は、前日にも「少なくとも39機もの軍用機がソ連領空を侵犯した」との報告を受けたばかりだった。

ベレシコフはドイツ外務省に繰り返し電話を入れたが、そのつど「外相は不在で、いつ戻るかわからない」という返事だった。

昼ごろ、ベレシコフは政治局長エルnst・ウエルマンに連絡がついた。ウエルマンはこう答えた。

「総統司令部で会合が開かれているみたいです。おそらく、全員そこに集まっているでしょう」

リッベントロップはこの日、外務省を離れていなかった。彼は部下に命じて不在を装わせて、モスクワのドイツ大使館に送る『緊急国家機密』と題する指令書の準備をしていた。翌朝早く、侵攻が始

まって2時間ほど経った後、駐ソ大使シュレンブルク伯爵が、攻撃の口実となる苦情書をソ連政府に届ける手はずになっていた。

午後の日差しが傾くにつれて、モスクワから入る請求はますます狂乱の度を強めた。ベレシコフは30分おきに外務省に電話したが、電話に出る上級職員は誰もいなかった。雰囲気は次第に重苦しいものへと変わり、ベレシコフは不安に駆られた。デカノゾフが本国に報告できることと言えば、「リッベントロップに会うためにあらゆる努力を致しましたが、成果はありません」と言うしかなかった。

モスクワでは、業を煮やしたモロトフが駐ソ大使シュレンブルク伯爵をクレムリンに呼びつけた。2人の関係は約2年前の「独ソ不可侵条約」の頃から変わって、とても冷え込んでいた。当然ながら最近は見会も疎遠になり、シュレンブルクはモロトフの呼び出しを奇異に思いながら、ある不安を胸に抱えていた。

午後9時半、クレムリンにあるモロトフの執務室で会見が始められた。

モロトフは独ソ開戦の噂にふれ、「ドイツの非難にどのような根拠があるのか」と問い詰めた。老伯爵はこのように答えた。

「私は貴下の質問に答えることが出来ません。私はこの問題に関する情報を持っていませんので」

モロトフは追究の手を緩めず、ドイツの不穏な動きを示す証拠を突きつけた。返事に詰まった老伯爵は、外務省の意向を聞くまではどんな質問にも答えられないと言葉を濁した。

シュレンブルクの不安が的中した。彼は非公式に、ヒトラーがソ連を侵攻する意思を持っていることを知っていた。2週間ほど前、シュレンブルクはモスクワに帰っていたデカノゾフを昼食に招いて、このことを警告した。駐ソ大使は内心、ソ連侵攻を反対していた。

シュレンブルクの話聞いたデカノゾフは、この警告が偽情報ではないかと疑った。彼はスターリンの熱烈な信奉者であり、スターリンと同じように、イギリスが諸外国に欺瞞情報を流してソ連をド

イツとの戦争に巻き込もうとしているのでないか、という考えに取り付かれていた。

「独ソ開戦」の噂は、これまで何度もささやかれていた。スターリンの手許には、ドイツ軍のソ連侵攻計画とその準備を示した情報、世界中に散らばった諜報員と各国の駐在武官から山のように届けられていた。

しかし、スターリンはどんなに具体的な報告を受けても、頑なにドイツ軍侵攻の可能性を受け入れなかった。その思い込みは約1ヶ月前、ナチス副総統ルドルフ・ヘスがイギリスに亡命した事件を受けて、ますます強まった。すべてはソ連を戦争に引きずり込もうとするイギリスの謀略だと、彼は決めつけた。

「ヒトラーを挑発することになる」として、スターリンは戦争に向けたいっさいの準備を禁じた。内外の度重なる警告にも彼は耳を貸さず、沈黙を押し通した。多くの赤軍幹部はドイツとの戦争を覚悟していたが、スターリンの意向を無視して独断で方策を打ち出すことは出来なかった。なぜなら、彼らの脳裏には4年前の凄惨な記憶がいまだ鮮やかに残っていたからであった。（一）

6月21日の夜、スターリンは国防相ティモシェンコ元帥から、越境したドイツの脱走兵が翌朝の対ソ侵攻作戦に関する情報を漏らしたとの報告を受けた。スターリンはこの情報を欺瞞だとして聞くともしなかったが、ティモシェンコの説得を受けてようやく戦争の準備に着手した。

参謀総長ジューコフ上級大将をはじめとする指揮官らと討議した後、スターリンは暗号特電「指令第1号」を送ることに同意した。

「1941年6月22〜23日の内に、レニングラード・バルト海・西部・キエフ・オデッサ軍管区において、ドイツ軍が奇襲攻撃を実施する可能性がある。しかし、我が軍は戦争拡大を招くような敵の挑発行動に乗ってはならない。同時に、各軍管区の部隊は万全の戦闘可能態勢を整え、ドイツおよびその同盟軍による万一の急襲に備えること。ただし、特別の指示がないかぎり、上記を超える行動を

取ってはならない」

この指令は日付がかわった午前0時半、参謀本部から發送された。この指令が、国境防備を統轄する各軍司令官に届いたのは、現地時間の午前3時ごろだった。しかし、前線の将官たちにはこの指令に対応する時間はもう残されていなかった。

それからわずか15分後—午前3時15分—に、ドイツ空軍の爆撃が開始された。

1・断絶（後書き）

（ ） スターリンがドイツ軍侵攻の可能性を受け入れず、最後の瞬間まで戦争の準備を怠ったのは有名な話で、いまだ議論されています。本作での私の見解は、あくまで「一説」であつて、さまざまな見解が歴史家のあいだから述べられています。

2・宣戦布告

夜が更けるにつれて、ベルリン大使館のベレシコフはリッベントロップに連絡することを諦めていた。ところが午前3時ごろ、電話が突然鳴った。受話器から響いた聞きなれぬ声に、ベレシコフは背筋に冷たいものを感じた。

「リッベントロップ外相は、外務省でソ連政府の代表にお目にかかりたいと申しております」

「大使の身支度と車の手配にいささか時間がかかります」ベレシコフは言った。

「外務省の車がすでに大使館の前に待機しております。外相は即刻、ソ連代表にお目にかかりたいとのことです」

デカノゾフとベレシコフが大使館を出ると、目の前に黒いリムジンが停まっていた。正装した外務省の役人がひとり、ドアの脇に立っていた。親衛隊（SS）の将校は車の助手席に座ったままであった。車が走り出す頃、6月22日の夜明けを迎えていた。

ヴィルヘルム通りに到着すると、辺りに人だかりが出来ていた。外務省の玄関は、撮影用の照明で明るくなっていた。2人のソ連外交官は報道陣に取り囲まれ、しばらくカメラのフラッシュを浴びせられた。

デカノゾフは落ち着いた様子で取材に答えていたが、ベレシコフは固い表情を浮かべていた。不安がますますつのり、なによりこの取材を予想していなかったのである。

ソ連代表の到着を待つ間、リッベントロップは落ち着きがなく室内を歩き回っていた。なぜなら、彼はこれから1939年8月24日に独ソ間で締結した「独ソ不可侵条約」の破棄を通告しなければならなかった。「今、ロシアを攻撃すると言われる総統は絶対正しい。こちらが攻撃せねば、ロシア人は必ず我々を攻めるはずだ」と、彼は繰り返し自分に言い聞かせていた。

ソ連代表の2人は、ドイツ外相の広々した執務室に案内された。

寄木細工の床がはるか向こうのデスクにまで続き、ブロンズ像が壁面に沿って延々と並んでいた。近づいてきたリッベントロップの様子を見ると、ベレシコフは「外相が酔っているな」と思った。リッベントロップの顔面は赤くむくみ、眼は充血してどんよりと曇っていた。

おざなりに握手を交わした後、リッベントロップは片隅のテーブルに2人を案内した。一同が席につくと、デカノゾフはドイツ政府に条約の保証を要請する声明文を読み始めた。

リッベントロップはそれをさえぎるように、口を開いた。

「おふたりをお招きしたのは、まったく違う理由からです」

ソ連代表は顔を見合わせた。

外相は言葉をとちりながら、述べた。

「ドイツに対するソ連政府の敵意ある態度と、ドイツ東部国境に集結するソ連軍部隊の由々しき脅威に鑑み、ドイツ帝国は軍事的対抗手段を取らざるを得なくなりました」

ベレシコフは頭をがんと殴られたようなショックを覚えた。ドイツ軍はすでにソ連侵攻を開始したに違いない。彼の通訳を聞いたデカノゾフは驚き、目を見開いた。

リッベントロップはぎこちなく立ち上がると、ヒトラーの覚書全文を提示した。駐独大使はすでに言葉を失っていた。

「総統の指示により、私はこの防衛措置を公式に貴下にお伝えする」

デカノゾフは、顔を真っ赤にして立ち上がった。

「ソヴィエト連邦を攻撃するとは、挑戦的かつ略奪的行為だ。侮辱するにも程がある。必ず後悔しますぞ。この代償は高くつくでしょうな！」

ソ連代表の2人がドアに向かうと、リッベントロップは急いでその後を追いつつ、せっぱ詰まった様子で囁いた。

「私個人はこの攻撃に反対であると、モスクワの方々にお伝えください」

デカノゾフとベレシコフが大使館に戻ると、ウンター・デン・リンドンではSSの分遣隊がすでに同地域に非常線を張っていた。

大使館に入ると、2人を待っていた館員たちから電話線は全て切断されたとの報告を受けた。そこで、無線をロシアの放送局に合わせた。モスクワ時間はドイツの夏時間よりも1時間早いので、日時は6月22日の日曜日、午前6時であった。館員たちはラジオに耳を傾けたが、ドイツ軍侵攻はまったく取り上げられていなかった。

午前3時15分、黒海艦隊司令官オクチャブリスキー提督はクレムリンに、セヴァストポリの海軍基地がドイツ空軍の爆撃を受けたとの報告を行った。マレンコフは提督の言葉を信じず、再度ひそかに電話して、士官たちが提督にそう言わせたわけではないことを確認した。

午前3時30分、国防人民委員部にいたジューコフも西部軍管区からの通報を受けて、ドイツ軍来襲の報告を受けた。彼はスターリンの邸宅に連絡を入れた。電話に出たスターリンはジューコフの報告を聞いても、黙ったままだった。ジューコフはしびれを切らした。「いま申し上げたことがお分かりになりましたか？」

「政治局の全員を集めるよう、補佐官に伝えてくれ」
そう言つて、スターリンは電話を切った。

スターリンはやつれた顔を引きつらせて、真つ先にクレムリンの執務室に入った。次第に政治局の幹部たち―ヴォロシーロフ、ベリヤ、マレンコフ、ヴォズネSENSキー、シチエルバコフらが集まり、軍部からジューコフとティモシェンコが参加した。

ティモシェンコが暗たる表情で、ドイツ軍の空襲を伝えた。しかし、この期に及んでもなお、スターリンは和平の可能性を捨て切れていなかった。

「あらためてベルリンと連絡を取り、大使館とも連絡を取らねばなるまい」

午前5時半、モロトフはクレムリンを離れた。外務省から、駐ソ

大使の接見の申し入れを伝えられたからであつた。しばらくして、モロトフは外務省から戻つてきた。執務室に入ると、全員が緊張した面持ちで自分を見つめているのを感じた。彼は席に座りながら、声を絞り出すように発した。

「ドイツ大使は、ドイツ政府がソ連に宣戦を布告した、と通告しました」

静寂がまるで闇のようにべったりと覆つた。スターリンは椅子にへたりこんで、言葉も出なかつた。世界に衝撃を与えた「独ソ不可侵条約」も、スターリンにしてみれば、時間を稼ぐための手段でしなかつた。しかし、彼は稼いだ時間をいわば無駄に過ごしてしまつていた。それは、独裁者自身が持つてゐる小心と猜疑心、過剰な自信を心のより所としたためであつた。

その日の朝、ソヴィエトの国民は祖国に降りかかつた災難について、まだ何も知らなかつた。シヨックが冷めやまぬスターリンは落ち着きをなくし、国民へのメツセージをモロトフに託した。

日曜日のモスクワは、行楽に向かう人々で溢れていた。正午になつて、モロトフの声がようやくラジオを通じて放送された。街道を行き交う人々は、拡声器の周りに集まり、耳を傾けた。

「ソ連の男女市民のみなさん！本日午前4時、ソヴィエト連邦に対していかなる苦情も申し立てることなく、宣戦布告もなしにドイツ軍は我が国に襲いかかり、多くの地点で我が国境を攻撃し、ジトミール、キエフ、セヴァストポリ、カウナスその他のわが諸都市を爆撃した」

モロトフの言葉の選び方は凡庸で、言葉もぎこちなかつた。

「これは文明諸国民の歴史に前例のない背信行為である。ドイツ人――血に飢えた指導者たちは友好条約による義務をすべて履行したロシア人に対する信義を破つた。赤色陸海軍人、赤色空軍の武勲赫々たるハヤブサらは侵略者を撃退するであらう。ナポレオンによる侵略へのわが人民の応えは祖国戦争であつた……赤軍と全国民がわれらの母なる国のため、名誉と自由のための祖国戦争を勝利の内に

進めるであらう。わが国の大義は公明正大である。敵は敗退し、我々は勝利するだらう」

3・世紀の瞬間

6月21日の夜半、クレムリンがベルリンとモスクワでむなしい外交努力を続けていた頃、東プロイセンとポーランドの白樺や樅の森の中には、膨大な数のドイツ軍部隊が潜んでいた。三千両以上の戦車、二千機あまりの航空機、七千門を超える野戦砲をはじめとする総兵力は、約130年前に編成されたナポレオンの遠征軍の約6倍に上った。()

1年で最も短い夜の日だった。目的も知らされずに、かつてない規模の部隊が数週間前から東部国境に集結していた。砲兵連隊は万全の準備を整えていた。予備の砲弾は偽装され、あらかじめ選ばれていた射撃陣地近くに隠されていた。無線は鳴りをひそめ、ひしめくように設置されたテントの中には、燃料を満杯にしたドラム缶や各種の資材が置かれていた。

日暮れに命令が下り、闇に覆われた森の中で各部隊は整列を始めた。部隊がそろったことを確認すると、指揮官たちは本国から送られた「総統指令」を片手に読み始めた。

「東部戦線の将兵に告ぐ」

部隊に緊張が走った。

「この瞬間に、史上最大の規模の作戦が開始されるのである。史上最大の本戦線が結成されたのは、大戦の究極的勝利の前提を作りながら、現在脅威を受けつつある国を守るだけでなく、全ヨーロッパ文明を救うためなのである。ドイツ軍将兵諸君、諸君は重い責任を担って厳しい戦いに入るのだ。ヨーロッパの運命、ドイツの将来、わが民族の生存はいまやひとえに諸君の双肩にかかっている」

「解散！」の号令が出ると、仕事が始められた。偽装が解かれた。納屋の隠し場所から引き出された各種の兵器は駄馬、ヘッドライトに覆いをしたハーフトラックや牽引車に引かれて、発射地点に運ばれた。砲兵の観測員は歩兵部隊とともに先頭に立ち、ソ連国境警備

隊の哨所から数百メートルの地点に迫っていた。

前線に布陣するドイツ軍は、3つの軍集団に分けられていた。

東プロイセンからニーメン河にかけて、北方軍集団（レープ元帥）が布陣していた。配下には第4装甲集団（ヘーブナー上級大将）と第16軍（ブツシュ上級大将）、第18軍（キュヒラー上級大将）があり、目標はバルト海沿岸のソ連軍の殲滅とレニングラードの占領であった。

ロミンテン荒野からブレスト・リトフスクの南方までは、中央軍集団（ボック元帥）が担当していた。配下には第2装甲集団（ゲデーリアン上級大将）、第3装甲集団（ホト上級大将）の他に第4軍（クルーゲ元帥）、第9軍（シュトラウス上級大将）を控えた最も強力な軍集団であり、最初の緒戦にミンスクで包囲網を形成する予定になっていた。そこでソ連軍の大多数を拘束した後、1812年のナポレオンと同じ進撃路を啓開することになっていた。

カルパチア山脈からプリピャチ沼沢地帯南方までは、南方軍集団（ルントシュテット元帥）が構えていた。配下には第1装甲集団（クライスト元帥）の他に第6軍（ライヘナウ元帥）、第11軍（シヨールベルト上級大将）、第17軍（シュトルプナーゲル大将）があり、ルーマニアを中心とする同盟国軍も含まれていた。目標はウクライナの穀倉地帯・鉱物資源とカフカス山脈に近い油田であった。

最前線の兵士たちの間では、不安と動揺が広がっていた。ほとんどの者が、この演習はイギリス侵攻の準備を隠すための陽動作戦だと信じていた。なにより恐ろしい噂しか聞いたことのない未知の国に侵攻するなんて気が進まなかった。

指揮官や将校の多くは興奮状態にあって、いたって楽観的だった。第二波の師団では、作戦の成功を期してシャンプンやコニャックがあげられた。不安を打ち明ける兵士たちを前にして、ある大尉はこう語った。

「ロシアとの戦争は1ヶ月足らずで終わるだろう」

3 世紀の瞬間（後書き）

（ ）ドイツ軍の総兵力については、いまだ議論が交わされています。多くの独ソ戦関連の著作で、それぞれの数字はだいぶ異なります。本作で上げた数字は、あくまでも「一説」であります。

4 バルバロッサ作戦

ヒトラーがいつから対ソ開戦構想を始めていたかは定かではない。だが、1925年に刊行した著書「わが闘争」においてすでに、ヒトラーは第三帝国のとるべき国家政策の最終目標としてロシアの征服を挙げていた。帝国の「生活圈（レーベンスraum）」の形成と維持には、ウクライナひいてはロシアの天然資源の活用が必須であると、彼は記している。

1940年7月の時点まで、ヒトラーは具体的な対ソ開戦を表明していなかった。しかし、対英戦の行き詰まりや「独ソ不可侵条約」に伴ったソ連邦の領土拡大によって東プロイセン・ルーマニアへの脅威が大きくなったことを受けて、ヒトラーは自身の構想を夢から現実のものにしなければならなくなった。

1940年7月21日、ヒトラーは陸軍総司令官ブラウヒツチュ元帥に対し、ソ連との戦争に関して具体的な研究を開始するよう命じた。ブラウヒツチュからヒトラーの意向を聞いた参謀総長ハルダー上級大將は、陸軍参謀本部の作戦課、地図測量課、ソ連関連の軍事情報を管轄する東方外国軍課の各部局でいくつかのチームを編成させ、対ソ攻撃の研究を平行して行なわせた。

陸軍の司令官や参謀将校たちは、ナポレオンが成し遂げられなかった野望に挑戦することへの興奮と不安を味わっていた。しかし、これらの研究の中で「赤い首都」モスクワを「占領すべき戦略目標」と位置づけていたのは少数だった。

ハルダーら陸軍首脳部の構想では、ソ連侵攻の主眼は「一夏の短期決戦による敵軍勢力の殲滅」にあった。特定の都市や地域の占領ではなく、可能な限り多くのソ連軍部隊を短期間の戦闘によって撃破することに重点が置かれていた。このことから、11月に陸軍総司令部（OKH）が作成した侵攻計画案「オットー」では、モスクワの占領はさほど重視されておらず、単に敵を誘導させるための「

おとり」のような位置づけにされていた。

12月5日、ハルダーはベルリンの帝国官房を訪れ、陸軍総司令官ブラウヒツチュ元帥や国防軍総司令部総長カイテル元帥、統帥部長ヨードル大将が列席する中で、「オットー」計画案をヒトラーに上申した。

ヒトラーは大筋で承認を与え、ただちに国防軍総司令部に侵攻計画の訓令起案を命じた。その際、ヒトラーは「レニングラードとウクライナの占領を侵攻作戦の第一目標として位置づけるべし」との意向を、ヨードルに示した。

国防軍総司令部（OKW）ではすでに同年7月31日から、フォン・ロスベルク中佐を中心に東方侵攻計画「フリッツ」の作成が進められていた。ヨードルら国防軍首脳部は自らの「フリッツ」案、陸軍の「オットー」案、ヒトラーの意向を考慮しながら、具体的な侵攻作戦の訓令づくりに取りかかった。

12月18日、国防軍総司令部から最終計画案がヒトラーに提出された。ヒトラーはこの案に多少の訂正を加えて承認し、総統訓令第21号「バルバロッサ作戦」として発令した。この訓令における戦略目標は、次のように説明されていた。

「プリピヤチ沼沢地以北の2個軍集団（北方・中央）の目標は、白ロシア（ベラルーシ）に布陣する敵兵力の包囲殲滅とレニングラードの占領である。この任務が達成された後、交通および軍需工業の中枢であるモスクワ攻略に向けた攻勢作戦を継続する。沼沢地の南部では、ドニエプル河流域の敵兵力殲滅を最優先目標とする。もし、諸会戦によって早期に敵兵力の撃破という任務が達成された場合には、沼沢地北部では迅速にモスクワに到達できるよう努力すること。モスクワの占領は、政治的・経済的に決定的な効果をもたらすと同時に、敵にとって最も重要な鉄道線の中枢を麻痺させることになるであろう」

この時点でヒトラーと陸軍首脳部は、「白ロシアとドニエプル河以西のウクライナでのソ連軍の殲滅」―作戦の第一段階―が完了す

れば、ドイツ軍の勝利は決定的であるという見解で一致していた。それ故、モスクワに進撃するか否かはその後判断しても遅くはないだろうという認識で止まっていた。

実際に部隊を率いる軍司令官たちはこの訓令を読むと、不可解きわまるといった気持ちを抱いた。それは主としてモスクワと他の戦略目標の優先順位が曖昧されていることであつたが、特に中央軍集団からその問題について大きな懸念が投げかけられた。

5・目標なき侵攻

「バルバロッサ作戦」の第1段階が終了した時点で、中央軍集団には第2段階の目標として、レニングラード、モスクワ、キエフの3都市が想定されていた。しかし、訓令の中ではそれらの相互の厳密な優先順位が明確にされておらず、司令部は事前に作戦計画を練ることが困難となった。

この状況に対し、まづ先に懸念を唱えたのが第3装甲集団司令官ホト上級大将だった。中央軍集団の北翼を担当するホトの装甲部隊は西ドヴィナ河に到達（第1段階）した後、「北に転進してレニングラードに向かう」べきなのか、「東進を続けてモスクワ攻略を目指す」のか2通りの解釈が可能だった。

同様の解釈は、中央軍集団の南翼を担当する第2装甲集団でも考えられた。すなわち、グデーリアンが率いる装甲部隊は第1段階が終了した時点で、南方軍集団を支援して「キエフに南進すべき」なのか、「東進を続けてモスクワ攻略を目指す」のかという状況である。

ホトとグデーリアンを統轄する立場にある中央軍集団司令官ボツク元帥は、戦略目標の明確な優先順位を問いただそうと、ブラウヒツチュとハルダーに繰り返し上申した。しかし、不思議なことに2人とも話を中断したり、はぐらかすといった曖昧な態度を取りつづけた。

1941年3月31日、「バルバロッサ作戦」に関する最高首脳会議が開催された。ブラウヒツチュとハルダーに話をはぐらかされて、業を煮やしていたボツクは戦略目標の優先順位をヒトラーに確認しようとした。ところが、ボツクがヒトラーに発言しようとする、議題の紛糾を恐れたブラウヒツチュとハルダーはボツクの発言を途中でさえぎってしまった。

会議の終了後、怒り心頭のボツクはハルダーに詰め寄った。

「本官が陸軍総司令部より受領している命令文によれば、中央軍集団の第2・第3装甲集団は、緊密に接触を保ちながら進撃すべしとなっておりますが？」

ハルダーは笑いながら、このように答えた。

「それはあくまでも『気持ちの上での』接触を言っているのだよ」
ボックはまたしても答えをはぐらかされ、結局、ホトの懸念も解消されずに終わった。このため、中央軍集団は明確な戦略目標を持たないまま、開戦の日を迎えることとなった。

ヒトラーと陸軍首脳部が「目標なき侵攻」に踏み切った背景にはさまざまな理由が挙げられるが、最も大きな理由のひとつとして、1940年の西方攻勢（対フランス戦）の勝利が挙げられる。

1940年5月10日に始められた「黄作戦」は立案段階から、長期戦になることを想定して慎重に計画が練られていた。しかし、「電撃戦」が想定外の大きな成功を収めたことにより、わずか6週間の戦闘で、西の大国フランスを事実上の降伏に追い込んだのである。

この勝利を受けて、ヒトラーは自国の軍事力に対する過剰な自信を持つようになり、参謀本部をはじめとする陸軍首脳部には対フランス戦の勝利を過大に評価する風潮が広まっていた。

「バルバロッサ作戦」の立案段階において、ハルダーら陸軍首脳部の構想は、特定の都市や地域の占領ではなく、可能な限り多くのソ連軍部隊を短期間の戦闘によって撃破することに重点が置かれていた。これは西方攻勢における勝利の図式をそのままロシアの大地に当てはめただけであり、参謀本部が東方制圧に対して楽観的な見通しを持っていたことを証明している。

「バルバロッサ作戦」の発動予定は当初、1941年5月15日とされていた。だが、その開始直前になって、ドイツ軍首脳部の計画を大きく狂わせる事態が発生した。それは1941年3月26日、

バルカン半島のユーゴスラヴィアでクーデターが起こり、反枢軸勢力の政権が発足したことである。

このユーゴ新政府はただちに日独伊三国同盟から脱退を表明し、4月5日には代わりにソ連との間で不可侵条約を締結してしまった。突如として「ソ連の同盟国」となったユーゴは、ドイツにとって「脇腹に突きつけられた短剣」と言える危険な存在となった。

ユーゴの背信にヒトラーは怒り狂い、4月6日、バルカン半島への侵攻作戦を命じた。この事態に伴い、「バルバロッサ作戦」の開始日は当初から約1ヶ月後に繰り下げられて、6月22日に変更されたのである。

1・突破

1941年6月22日午前3時ごろ、ドイツ空軍の爆撃機隊30個が高高度でソ連国境を越えた。その後、3つの集団に分かれた爆撃機隊は、午前3時15分に10か所のソ連空軍基地を正確に破壊した。

日の出とともに、ドイツ空軍はさらに爆撃機500機、急降下爆撃機270機、戦闘機480機をもつて、ソ連の飛行場66か所の攻撃に移った。ソ連空軍はこの日の朝だけで1200機以上の航空機を失い、それからわずか数日間にドイツ空軍は完全に制空権を確保し、ソ連の全ての部隊と鉄道網に対して容赦ない空爆を行なった。

ドイツ軍地上部隊でも、午前3時15分に最初の砲撃が始まった。河川にかかるいくつもの橋はNKVD国境警備隊が反撃するまもなく占領された。場合によっては、隠密襲撃班が橋に仕掛けられた爆発物を前もって処理しておいた。いくつかの国境哨所はNKVD国境警備隊が集合する前に突破され、どこにおいても軽微な抵抗しか受けなかった。

この頃になると、ドイツ中央軍集団と対峙するソ連西部正面軍（西部軍管区より改組）司令部には、配下の各軍司令部（北から第3軍・第10軍・第4軍）から緊急の無線連絡が絶え間なく押し寄せてきた。

「ドイツ軍が広範囲に渡って我が国への攻撃を開始しました！」

「グロドノをはじめ、我が国の都市がドイツ空軍によって空爆されています！」

「部隊と司令部を結ぶ電話線は、敵空軍の爆撃で寸断されました！」
相次ぐ断片的な情報に、西部正面軍司令官パヴロフ上級大將は困惑してしまい、副司令官ボルディン中將を呼び出した。ドイツとの戦争はまだ先だと信じていたパヴロフは不可解きわまるといった表情を浮かべ、ボルディンに状況を説明した。

「はつきりしたことは不明だが、何か悪いことが起きつつあるようだ。少し前にクスネツォーフ（ ）がグロドノから連絡してきたが、ドイツ軍が空と陸から攻撃を開始したと言ってきている。第4軍と第10軍の司令部からも同じような不愉快な報告が入ってきているんだ」

午後3時ごろ、ボルディンは自ら前線の状況を確認すべく、ミンスクから一群のドイツ機の中を突破して、最も危機が迫っている国境付近のビアリストク突出部に置かれた第10軍司令部へと飛んだ。第10軍司令部はすでに爆撃で破壊されたビアリストクの市街地から避難し、郊外の森林に移転していた。そこでボルディンは、第10軍司令官ゴルベフ少将から、司令部の状況を聞いて愕然とした。電話線は切断されて使用できず、上級・下級いずれの司令部とも連絡がつかない。さらに無線機は敵の妨害電波により、断続的にしか通じなくなっていた。軍司令部はほとんど名ばかりで、何の機能も果たしていなかったのである。

ソ連軍には知る由もなかったが、ドイツ軍は最初の空爆が始まる前に、第800特殊任務教導連隊「ブランデンブルク」を、ソ連国内の後方地域に潜入させていた。ロシア語に堪能な特殊部隊の兵士たちは赤軍の制服を着て、後方地域に落下傘で降下し、電話線の切断、重要な道路や橋の確保などといった不安と混乱を拡大させる工作活動に従事していた。

この日の夕刻、モスクワのクレムリンは「指令第3号」を発令した。その内容の趣旨は「手持ちの全兵力を用いてドイツ軍に全面的な反攻を実施し、敵部隊を包囲殲滅せよ」というものだったが、何度と同じ言葉を繰り返しており、ロシア語的に奇妙な表現がなされていたのは、ドイツ軍の奇襲にショックを受けたスターリンが取り乱していたことを物語っていた。

1 突破（後書き）

（ ） 第3軍司令官。階級は中将。ソ連軍の司令官は同姓（特にクズネツォーフ、ポポフ、ベロフ、ニキティンなど）が多く混同しやすいので、脚注がない場合は原則、別人である。

2・ミンスク包囲戦

ドイツ中央軍集団では、第3装甲集団がソ連北西部・西部正面軍の境界線に沿って、東方に進撃していた。

第39装甲軍団（シュミット大将）は24日の早朝にはヴィルニユスに到達し、北西からミンスクに迫ろうとしていた。隣接する第57装甲軍団（クンツェン大将）はソ連第3軍（クズネツォフ中将）の防衛線を突破して西ドヴィナ河の上流に向かって進撃し、後方の第5・第6軍団が背後に残る敵部隊の掃討に従事していた。

第2装甲集団はソ連第4軍（コロブコフ少将）の陣地を突破して、ミンスクに向かう街道を東方へ進撃していた。途中、第14機械化軍団（オボーリン少将）の反撃に遭遇したが、定員割れの旧式戦車しかない部隊は、ドイツ軍の強力な装甲部隊の敵ではなかった。

この2個装甲集団の間隙部には、第4軍・第9軍の歩兵部隊が南北から襲いかかった。装甲部隊が決じ開けた突破口に前進し、ビャリストク周辺の敵部隊が東方へ脱出することを防ぐのが、彼らに与えられた任務だった。

一方、パヴロフは切迫する事態にひどく取り乱してしまい、代わりにボルディンが全軍の指揮を執ることになった。22日の夕方、ボルディンとゴルベフはパヴロフから「指令第3号」を受け取ったが、その内容に愕然としてパヴロフに抗弁した。

「現状の兵力では、そのような反撃に出ることは自殺行為です！」
パヴロフは断固とした口調で、2人の将軍に言い放った。

「これは命令なのだ！君らは黙ってそれを遂行すればよろしい！」

6月23日、ボルディンは「指令第3号」に従い、第10軍の第6機械化軍団（ハツキレヴィチ少将）と第6騎兵軍団（ニキティン少将）、第3軍の第11機械化軍団（モストヴェンコ少将）に対し、反撃を命じた。ビャリストク周辺で包囲の危険にさらされている部隊を救援することが目的だった。

しかし、この反撃はドイツ軍の圧倒的な進撃になんら影響を与えないこともなく、ソ連軍は燃料と弾薬を消費して大きな損害を被った（ ）。

もはや反撃は無意味だと判断したボルディンは独断で、残存兵を小グループに分けて、ビャリストクから東方のミンスクへの撤退を命じた。しかし、北方では第3装甲集団、南方では第2装甲集団が並行に進撃して、ミンスクにおいて大包囲網を形成しようとしていた。

6月25日、ドイツ第2装甲集団はバラノヴィチを占領した。第47装甲軍団（レメルセン大将）はモスクワ街道沿いに南西からミンスクに迫り、第24装甲軍団（シュヴェツペンブルク大将）は進路を東に取ってスルーツクへ向かった。

この状況を受けて、パヴロフは撤退せざるを得なくなり、夜間にスロニムからシュハラ河の東岸への総退却を第3軍・第10軍に命じた。絶え間ないドイツ空軍の攻撃を受けながら、各部隊は燃料と輸送手段の大半を失って、徒歩で撤退した。しかし、命令系統は依然として寸断されたままだったので、ドイツ軍と交戦を続けた部隊も数多くあった。

6月26日、戦況を悲観したパヴロフはモスクワに、「1000両以上の敵戦車が北西方面よりミンスクを包囲しつつあり。これに適する手段なし」との電文を送った。さらに包囲されつつあるミンスクから、正面軍司令部を慌てて東方のポブルイスクに移転させたことにより、所属の各部隊との連絡は絶望的にまで悪化した。

このような状況下で、正面軍の戦略予備としてミンスク周辺に配置されていた7個軍団は、第13軍（フィラトフ中將）として編成され、ドイツ第2装甲集団の進撃を食い止めるべく反撃に乗り出した。しかし、第20機械化軍団（ニキティン少將）と第4空挺軍団（ジャドフ少將）による捨て身の反撃も第46装甲軍団（フィーティングホフ中將）によって壊滅され、ベレジナ河へと退却した。

6月27日、第2装甲集団の第17装甲師団が、ミンスク近郊で

第3装甲集団の第20装甲師団と連結し、ついにビアリストク突出部はドイツ軍によって完全に包囲された。翌日には、第20装甲師団がミンスク市内のほぼ全域の占領を完了した。

これにより、ドイツ中央軍集団は侵攻開始日から約1週間で、「バルバロッサ作戦」の第1段階である「ドニエプル河以西でのソ連軍の殲滅」を、ほぼ完全に達成できた。

ミンスク西方にて巨大な包囲網に閉じ込められたソ連第3軍・第10軍の残存兵は、東と南東に向けて必死の脱出を図り、戦車や重砲などの装備はほとんど放棄した。指揮系統から完全に外れ、小グループに分かれたソ連兵たちは東方の湿地と森林の混合地帯（ポレーシエ）へと逃げ込んだ。

開戦時、62万を超える兵士を有していた西部正面軍は事実上消滅し、28万7000人が捕虜となり、2585両の戦車、1494門の火砲がドイツ軍によって捕獲・破壊された。配備されていた1909機の航空機も、その4分の3が破壊された。

7月1日、西部正面軍司令官を解任されたパヴロフは参謀長クリモスキフ少将、通信担当グリゴリエフ少将ら6名の将官とともにモスクワに召喚された後、反逆罪で逮捕・起訴された。そして、軍籍とすべての勲章を剥奪された上で、開戦から1ヶ月後に銃殺刑に処されたのである。

2 ミンスク包囲戦（後書き）

（ ） 第6機械化軍団長ハツキレヴィチ少将は戦死。

3・攻城

6月30日、ドイツ第2・第3装甲集団はミンスク西方で、巨大な包囲網を完全に封鎖することを完了した。ドイツ軍はこの最初の包囲戦によつて41万を超えるソ連兵を死傷または捕虜にするという大きな勝利を得たが、そこにはすでにいくつかのひびが入っていた。

このとき、ドイツ軍には包囲したソ連軍を完全に密封するのに十分な兵力を持つていないことが判明した。ミンスク包囲戦でも、約20万のソ連兵が重装備を放棄して、東方への脱出に成功していた。ヒトラーは装甲部隊に対し、包囲が完了するまで前進を停止するよう命令した。しかし、この命令に対して、第2装甲集団司令官グデーリアン上級大将が異議を唱えた。

グデーリアンはわずかでも装甲部隊が停止すれば、その間に赤軍に再集結の余裕を与えてしまうと恐れていた。さらに彼は「早期のモスクワ攻略」こそが独ソ戦の勝利につながると考えていたので、ハルダー参謀総長に対し、「自分の責任でさらに東進を続けたい」という要望を繰り返し訴えた。

最終的には、ハルダーはグデーリアンの要望を受け入れた。この決断の背景には、「イワン」すなわち一般のソ連兵士たちの最後まで戦い抜く姿勢があった。

ドイツ兵たちはソ連兵をスターリンに痛めつけられたロボットだと考えていた。しかし、ソ連兵は西側の兵士なら降伏したであろうと思われる状況に陥つても、異常な勇氣と自己犠牲の精神を発揮して立ち向かった。このことは、すでにドイツ中央軍集団の最初の障壁で示されていた。

6月22日、ドイツ第2装甲集団の装甲部隊が迂回する中、第12軍団（シュロート大将）の第45歩兵師団（シュリーパー少将）は、水路と城壁で囲まれたブレストリトフスク要塞に襲いかかつ

た。

前時代的な要塞そのものは特に戦略的な価値を持っていなかったが、要塞内に据えられていたソ連軍の大砲は、中央軍集団の兵站到重要な鉄道や道路を射程圏内に捉えていた。後方地域の安全を確保するために、この要塞をいち早く手中に収める必要があったのである。

ドイツ歩兵部隊は最初の砲撃で要塞の大部分はすでに崩壊していると見込んでいたが、煉瓦とコンクリートで造られた要塞は思いのほか堅牢だった。さらにソ連第28狙撃軍団（ポポフ少将）は必死の抵抗を繰り返し、ドイツ兵は要塞のわずかな部分しかに突入することが出来ず、大きな損害を被った。

翌日以降、ドイツ軍は重砲と空爆でソ連軍の防御地点を粉碎しようと試みたが、要塞に立てこもったソ連兵は手持ちの武器と弾薬がある限り、ドイツ軍に銃口を向け続けた。ついには、市街戦を彷彿させるような接近戦に突入し、その結果、ドイツ軍の損害は日に日に増大していった。

6月28日、中央軍集団司令部がミンスクの陥落に沸く頃、ブレスト要塞をはまだ占領されていなかった。焦りを募らせた第12軍団司令部は、第3航空爆撃団に対し、航空支援を要請した。夕刻、爆撃隊は500キロ爆弾や1800キロ爆弾を雨のように投下して、コンクリートで固められた防護施設を徹底的に破壊した。

6月30日、第45歩兵師団はようやく要塞の大部分を占領したとの報告を行った。しかし、一部の拠点では7月下旬までソ連兵による散発的な抵抗が続いたのである。

一方、白ロシアの大半を緒戦に失ったクレムリンは、消滅した西部正面軍を早急に新編し、ドイツ軍がドニエプル河に到達する前に反撃に出ようと試みていた。

6月28日、ミンスクが陥落したこのとき、極東第1軍司令官アンドレイ・エレメンコ中將がモスクワの国防人民委員部に出頭した

（１）。ひと通り戦況の説明を受けた後、国防相ティモシェンコ元帥が発した言葉にエレメンコは内心おどろいた。

「パヴロフ將軍と參謀長は即刻、解任された。政府の決議で、貴官が西部正面軍司令官に任命されたのですぞ」

「この戦区での使命は？」

ティモシェンコの答えは簡潔だった。

「敵の前進を食い止めること」

6月29日の早朝、エレメンコは參謀を引き連れ、モギリヨフ近郊の西部正面軍司令部を訪れた（２）。まだ司令部にいたパヴロフは驚き、厳しい表情を浮かべたエレメンコは黙って青い封筒を手渡した。その中身を読んだパヴロフの顔が青ざめた。

「人民委員（国防相）はモスクワに来るよう命じました」

弁解しようとするパヴロフをモスクワに出頭するよう命じた後、エレメンコは前線の状況を調査して回った。すでにドイツ中央軍集団は前日にベレジナ河畔のスヴィスロチに到達しており、もし約80キロ上流のボリソフも占領されれば、西部正面軍はベレジナ河西岸の狭い領域に再び包囲される恐れがあった。

7月2日、「暫定司令官」エレメンコはこの現状を踏まえて、1日付けで「指令第14号」を発令した。西部正面軍の残滓である第4軍・第13軍の残存部隊をドニエプル河の西を流れるベレジナ河東岸の防衛線に收容しようと考えたのである。その最中、ドイツ中央軍集団は再び東進を開始し、同日中にベレジナ河の渡河に成功していた。

3・攻城（後書き）

（ 1 ）開戦当日の6月22日、ザバイカル軍管区に所属していたエレメンコはシベリア鉄道の列車内にいた。出頭命令は6月19日に出されていた。開戦の知らせを聞いたエレメンコはノヴォシビルスクで列車を降り、飛行機でモスクワまで飛んだ。

（ 2 ）前の司令部が置かれていたボブルイスクは6月28日、ドイツ第2装甲集団によって占領された。

4・快進撃

プリピャチ沼沢地帯北方では、ドイツ軍の突破が最初の緒戦から急速な成功を収めていた。北方軍集団は第4装甲集団を先頭にして、東プロイセンからニーメン河を渡って早くもリトアニア・ラトヴィアに侵攻した。

一方、北方軍集団と対峙するソ連北西部正面軍（バルト軍管区より改組）司令官クズネツォフ大將は西部正面軍のパヴロフとは異なり、ドイツとの戦争は間近に迫ってきているとの認識を持っていた。すでに6月18日には第11軍（モロゾフ中將）の狙撃師団に對し、国境付近に布陣するよう命令していた。

だが、ドイツ軍の侵攻が開始されると、状況は南翼の西部正面軍とさして変わらなかった。通信網は各地で寸断され、指揮系統を完全に乱された各軍司令部（北から第8軍・第27軍・第11軍）は、無線や電話で断片的に伝えられる情報を基に前線の状況を把握しなければならなくなった。

6月22日夕刻、第56装甲軍団（マンシュタイン大將）はアリヨーガラ付近で、ソ連第8軍（ソベンニコフ少將）の防御陣地を突破し、最初の障壁であるドウビサ河の渡河に成功した。その後は小規模な反撃に遭遇しながらも、1日に約70キロという驚異的な速さで進撃した。マンシュタイン自身が、この「猛烈な進撃は装甲部隊指揮官としての夢の実現だった」と記すほどであった。

同時刻、クレムリンが発令した「指令第3号」が北西部正面軍に伝達された。クズネツォフは第11軍の第3機械化軍団（クルキン少將）と第8軍の第12機械化軍団（シエストパロフ少將）に所属する各戦車師団に反撃を命じたが、これらの部隊は国境から50キロ離れた陣地に散開した状態にあり、兵力を分散させて攻撃せざるを得なかった。

6月23日、第12機械化軍団の第28戦車師団（チエルニャホ

フスキー大佐）がシャウリヤイ街道上のケルメで、ドイツ第18軍の2個歩兵師団に襲いかかった。しかし、ドイツ軍の対戦車砲によって装甲の薄い旧式戦車を次々と撃破され、大半の戦車を失って第28戦車師団は北へと敗走した。

6月24日、第41装甲軍団（ラインハルト大将）はロツシエニ工付近で、ソ連第3機械化軍団の第2戦車師団（ソリヤンキン少将）と第48狙撃師団（ボグダーノフ少将）の残存兵による大規模な反撃に遭遇した。

このとき、第2戦車師団に所属するKV1、KV2やT34が少数ながら初めてドイツ軍の前に登場し、主力戦車の装備砲や歩兵部隊に配備されている対戦車砲の砲弾をことごとく跳ね返して、ドイツ軍を一時的にパニックに陥れた。

第41装甲軍団の装甲部隊は機動力を生かした接近戦を行い、稚拙な協同運用しかできないソ連軍の戦車部隊は燃料や弾薬の欠乏も重なり、26日の早朝には壊滅してしまった（）。そして、この時にはドイツ第56装甲軍団が作戦の第1目標であるドヴィンスクに到達していたのである。

レニングラードの占領を最終目標とするドイツ北方軍集団にとって、最大の障壁となるのが国境から約250キロの周辺を流れる西ドヴィナ河であった。大規模な軍隊の補給路として使用できる橋梁がリガとドヴィンスクの2カ所にあり、特にドヴィンスクはレニングラードを最短距離で狙える位置にあるので、ここでの橋頭堡の奪取は至上命令とされていた。

6月26日、「ブランデンブルク」特殊連隊の中から、第8中隊長代理クナーク中尉を長とする工作隊が編成された。ソ連軍の軍服を着た隊員たちは、鹵獲したソ連製トラックに分乗して、ドヴィンスクの西ドヴィナ河を渡る道路橋に迫った。友軍だと思って油断したソ連兵を、ドイツ軍は機銃掃討で奇襲し、橋に仕掛けられた爆薬を取り外した。その後、第56装甲軍団の第8装甲師団が橋を渡って対岸に進出し、最初の橋頭堡を築くことに成功した。

6月28日、クレムリンは戦略予備から第21機械化軍団（レリユウシエンコ少将）を前線に投入し、ドヴィンスクのドイツ軍橋頭堡を排除しよう命じた。この反撃に対し、ドイツ軍は必死に応戦してソ連戦車の波状攻勢を何度も押し返した。燃料と弾薬を使い果たしたソ連軍は、大きな損害を被って退却に転じた。

こうして、ドイツ北方軍集団はわずか4日にして、レニングラードまでの約750キロの道のりのうち約3分の1を踏破することに成功したのである。装甲部隊はドヴィンスクの橋頭堡からさらなる東進を続けようとしたが、後続の補給部隊が装甲部隊の目覚しい速さに付いて行けず、先鋒部隊は7月2日まで攻撃の停止を余儀なくされた。この間にもソ連空軍は果敢な反撃を繰り返したが、ドヴィンスクの橋頭堡は無傷のまま残された。

4・快進撃（後書き）

（ ）開戦からわずか1週間足らずで、ソ連軍の機械化軍団はこのような敗北によって大きな損害を被り、戦力の約9割を失うことになる。

5・反撃

プリピヤチ沼沢地帯南方では、ドイツ軍は北部・中央部ほどの戦果を上げられなかった。なぜなら、急きよ4月に行われたバルカン半島侵攻作戦のために、南方軍集団の多くの装甲部隊が南ポーランドの出撃地点に集結できていなかった（1）。このため、最初の一撃を、第6軍と第17軍の歩兵部隊だけで与えざるを得なかった。

6月22日、第17軍の戦区では、ソ連第6軍（ムズィチエンコ中将）の狙撃師団とNKVD部隊の抵抗が思いのほか激しく、攻撃を阻止されてしまった。一方、国境に流れるブグ河では、第6軍と第1装甲集団の歩兵師団が橋頭堡の確保に成功し、第3装甲軍団（マッケンゼン大将）がその突破口を決じ開けた。

その夜、ソ連南西部正面軍（キエフ軍管区より改組）司令官キルポス上級大將は「指令第3号」を受け取った。さらには、スターリンの命令でモスクワから参謀総長ジューコフ上級大將がテルノポリの南西部正面軍司令部に派遣され、戦略予備の機械化軍団を用いた大規模な反撃計画の立案に取り掛かった。

赤軍参謀本部は戦前から、ドイツ軍の攻撃はいずれにせよウクライナに集中すると想定していた。そのため、南西部正面軍にはドイツ南方軍集団に比べ、より多くの機械化部隊が配属されていた。全ての部隊が完全装備もしくは訓練を完了していたわけではないが、北翼の西部正面軍に比べるとはるかに良好な状態にあった。

しかし、南西部正面軍の所属部隊（北から第5軍・第6軍・第26軍・第12軍）はまだ400キロ後方の兵舎から集合中で、ドイツ空軍の攻撃を受けながら前進しなければならなかった。そのためキルポスとジューコフは、侵攻してきたドイツ軍の側面を叩くため、行軍中の部隊から兵力を分散させて早急に攻撃に向かわせざるを得なくなった。

6月23日、第6軍の第15機械化軍団（カルペゾ少将）に所属する2個戦車師団が、ミリアチン付近で包囲された第124狙撃師団を救出しようとして、ドイツ軍の南翼に向かって攻撃を行なった。しかし、湿地帯とドイツ空軍の空襲によって、この反撃は失敗に終わってしまった。

反撃を乗り切ったドイツ第48装甲軍団（ケンプ大将）の第11装甲師団（クリューヴェル少将）は夕方、東方への進撃を再開した。そして、国境から約80キロ付近を流れるストイリ河の渡河に成功した。

6月24日、第5軍（ポタポフ中将）はルーツク西方に進撃してきたドイツ第3装甲軍団の北翼に対して、第22機械化軍団（コンドルーセフ少将）を投入した。しかし、第3装甲軍団の先鋒を務める第14装甲師団（キューン少将）は？号戦車の新型を保有しており、旧式戦車しかないソ連軍はかなりの損害を被って北東に敗走した（2）。

6月25日、第14装甲師団がルーツクを占領した頃、楔形に進撃を続けるドイツ第1装甲集団の先鋒を務める第11装甲師団は、国境から約110キロの地点に位置する交通の要衝ドウブノの占領に成功していた。

この時までに、キルポノスは十分な機械化兵力を集結させることが出来たが、掩護のための狙撃部隊を伴わずに攻撃を開始させることになった。採択された反撃計画としては、ルーツク＝ドウブノの突出部を南北からの挟撃で押し返すこととされた。

6月26日、第26軍（コステンコ中将）の第8機械化軍団（リヤブイシェフ中将）はブロドイの南から進撃し、KV1とT34を先頭にドイツ第57歩兵師団（ブリュンム中将）に襲いかかった。有効な対戦車砲を持たないドイツ軍の歩兵部隊はパニクに陥り、陣地を放棄して西方に敗走した。勢いづいたソ連第34戦車師団（ヴァシリエフ大佐）はドウブノを奪回しようとしたが、ドイツ第6軍の主力部隊の中に突っ込んでしまい、ひどい打撃を被ってしまった。

った。

第6軍の第15機械化軍団もまたKV1とT34を保有していたが、協同作戦の失敗から軍は分断され、反撃に失敗してしまった。ボロボロになった残存部隊は7月1日、東方のジトミールへの脱出に転じた。しかし、航空攻撃と湿地帯に悩まされて、多くの部隊が大きな損害を被ってしまった。

ドウブノの北翼でも26日、第19機械化軍団（フェクレンコ少将）は、少数のKV1とT34を先頭にドイツ第11・第13装甲師団に反撃した。一進一退の攻防が繰り返されたが、ドイツ軍の装甲部隊が態勢を立て直すと、食い止められてしまった。翌日、ソ連軍の戦車部隊は再び反撃を試みたが、ドイツ軍の進撃を止めることはできなかった。

反撃に参加するはずだった第5軍の第9機械化軍団（ロコソフスキー少将）は、部隊の集結が間に合わず26日の昼ごろは限定的な反撃を行うに留めた。軍団長のロコソフスキーは戦場のごく一部しか見ていなかったが、反撃が非現実的なものに思えた。翌日、ロコソフスキーは反撃を命じたが、第19機械化軍団との連携がとれず、多くの旧式戦車を失う結果となった。

6月28日、攻撃再開の命令が来た時、ロコソフスキーは攻撃せずにロブノへ進撃中のドイツ第13装甲師団（ロートキルヒ少将）を待ち伏せした。この作戦は成功して、ドイツ軍はソ連の集中砲火の中に突っ込んで大損害を被ることになった。しかし、ドイツ軍の装甲部隊の東進を食い止めることは出来ず、ロブノを占領されてしまった。

両翼から執拗な反撃を受けたドイツ第1装甲集団は、空軍のJu88（シュトゥーカ）をはじめとする航空支援と部隊の立て直しによって、前線に空けられた突破口を次々と塞いでいった。

6月30日、これ以上の反撃は自軍の損害を増やすだけだと悟ったキルポスは反撃の中止を命じ、各部隊の再編と退却をせざるを得なくなった。しかし、この南西部における激しい反撃は失敗した

にせよ、ドイツ軍の進撃を多少なりとも遅らせることには成功したのである。

5・反撃（後書き）

（ 1 ）バルカン半島侵攻は、もともとイタリア軍が主体で1940年から始められていた。しかし、戦況は膠着し、ユーゴの「脱枢軸」までバルカン半島は占領されなかった。

（ 2 ）この戦闘で軍団長のコンドルーセフは戦死。

1・独裁者

1941年6月のドイツ国防軍ほど、有利な立場を享受した攻撃側はない。前線の状況についての詳細な情報の欠如が、ソ連軍に一層の困難を経験させることになった。緒戦の数日間、ソ連の各戦線は大混乱、無秩序状態に陥っていた。各司令部は次々と新しい指令や命令を出したが、刻々と変化する情勢に立ち遅れたものばかりだった。

スターリンは突然の開戦から、前線から絶え間なく押し寄せる敗戦に知らせに憤慨しつつも、クレムリンで通常の公務を続けていた。彼はまだ、赤軍とドイツ軍の間にある歴然とした戦闘能力の違いを認識せず、やがて赤軍の反撃が始まり、戦線を西へと押し返すであろうと考えていた。

6月28日、スターリンの下に衝撃的な報告がなされた。西部正面軍が壊滅し、白ロシアの首都ミンスクがドイツ軍によって占領されたという。彼は激昂して「わしは指導部から手を引く」と言い残して、モスクワ郊外の別荘に引きこもった。

6月29日、スターリンは突然、数人の党幹部を引き連れて国防人民委員部に姿を現した。そして、まっすぐティモシェンコ国防相の執務室に押し入り、そこにいたティモシェンコその他、ジューコフをはじめとする大勢の参謀将校に向かって怒鳴った（ ）。

「前線の状況はどうなっておる？」

ティモシェンコが答えた。

「現在、前線からの報告を分析中ですが、確認する点がいくつかありますので、今すぐには報告できる状態にはありません」

スターリンは怒りを爆発させた。

「おまえは単に、本当の事をわしに報告することが怖いだけだろうが！おまえらは白ロシアを失った！そしてまた失敗をしでかして、わしを驚かそうというのか！ウクライナはどうなっている？バルト

方面は？　いったいおまえらは前線を指揮しているのか、それとも単に自軍の損害を数えて記録しているだけなのか？」

ジューコフが口を挟んだ。

「どうか私たちに仕事を続けさせてください、同志スターリン。私たちの任務は、まず前線の指揮官を助けることであって、それから状況の報告を・・・」

「何が参謀本部だ！　何が参謀総長だ！　初日から慌てふためきやがって！　何も把握できておらんじゃないか！　ここは誰が指揮しているんだ！　この負け犬どもめが！」

執務室は絶望的な空気で満たされた。理不尽な叱責を浴びせられたジューコフは執務室を出ると、別室に引きこもった。スターリンは別荘に戻る車中で、こう呟いた。

「我々はレーニンが残した偉大な遺産を、すべて台無しにしてしまった・・・」

このとき、スターリンはある事実を見逃していた。最初の緒戦におけるソ連軍の混乱の原因は、まさしく独裁者そのものにあった。彼が持つ偏執と妄想癖、そしてかつて自身が軽視されたことに対する復讐心が、1930年代にロシアを覆った悪夢の日々の引き金となったのである。

1・独裁者（後書き）

（ ） ジューコフは26日の夜に、南西部正面軍司令部からモスクワに戻ってきていた。

2・肅清

1935年9月、赤軍の参謀本部でドイツを仮想敵国とした本格的な戦争計画の研究が始められた。この研究で中心的な役割を果たしたのが、当時の国防次官兼戦備局長トウハチエフスキー元帥であった。彼は共産主義を批判するヒトラーに警戒感を持ち、将来ドイツとの戦争は避けられないとの認識を持っていた。

トウハチエフスキーはソ連内戦の英雄であり、ソ連軍の作戦概念である「縦深作戦」の提唱者であった。この「縦深作戦」とは、「敵側の前線から後方までを空爆と砲撃で同時に制圧し、その援護の下、機械化され機動力の向上した地上部隊が敵陣深くまで突破する」というものであった。この概念に基づいて、トウハチエフスキーは空挺部隊、機械化部隊の創設を強くスターリンに進言していた（1）。

スターリンはトウハチエフスキーの提案を気前よく受け入れる一方、職業軍人らに対して深い猜疑心を募らせていた。ロシア内戦時トウハチエフスキーら旧帝政軍はヴィスワ河において敗北を喫したというのがその理由だった。だが、実際は彼もまた多くの独裁者と同様に、自分への忠誠と自己の権威への服従を部下たちに求め、トウハチエフスキーのような自立した思考を持つ者に対しては不安を抱いていたのである。

そして、スターリンの内戦時代からの盟友である国防相ヴォロシロフ元帥が、独裁者の疑心暗鬼をさらに煽ったのである。彼はトウハチエフスキーがトロツキーの下で働いていたことやドイツに長く滞在していたことを理由に、彼がトロツキストまたはドイツのスパイであると周囲に言い触らしていた（2）。

ブジョンヌイ元帥もまた、トウハチエフスキーの活動を苦々しく思っていた。ヴォロシロフと共に騎兵軍の司令官として名を上げたブジョンヌイは、もしこのまま赤軍の機械化が進めば、自分たち

の権限が縮小され、地位を失いかねないと危機感を抱いていた（3）。

粛清は、段階的に行われた。1934年12月1日、レニングラード共産党議長キーロフが暗殺されると、スターリンはこれを「トロツキストの陰謀」として、秘密警察（NKVD）に多くの共産党幹部の逮捕を命じた。彼らは見せしめ裁判の末、銃殺された（4）。

赤軍の粛清は、1937年に始められた。5月27日、トゥハチエフスキー元帥以下数名の同僚が逮捕された。この粛清が尋常でなかったのは、全ての審理が非公開かつ大急ぎで行われた点に現われている。

6月12日、ヴォロシロフはトゥハチエフスキーと2人の軍管区司令官、その他6人の高級将校の処刑に関する布告を簡潔に公表した。

この粛清によって、元帥5人のうち3名、軍司令官級15人のうち13人、軍団長級85人のうち62人、師団長級195人中110人、旅団長級406人中220人、大佐級も4分の3が殺され、大佐以上の高級将校の65%が独ソ開戦までの4年間に姿を消した。逮捕された将校への容疑や証拠は、ほとんど捏造によるものだった。ロコソフスキーに至ってはおそらくポーランド出身という彼の出生がスターリンの猜疑心に触れ、彼は20年も前に死んでいる男が提供したとされる証拠を突きつけられ、日本およびポーランド秘密警察のスパイ容疑で3年間投獄された。

粛清によって当然のことながら、軍隊の管理と訓練は損なわれ、これが緒戦時の壊滅的打撃の一因となった。その上、「縦深作戦」は依然としてソ連軍の公式の作戦概念ではあったが、トゥハチエフスキーの急死によってこの概念も機械化部隊の構想も水泡に帰し、彼の著作は公共の場から回収され廃棄された。

2・肅清（後書き）

（1）赤軍に機械化部隊が初めて創設されたのは、ドイツ軍より3年早い1932年のことだった。

（2）1920年代、ドイツとソ連は「秘密軍事協定」を結んでいた。トウハチエフスキーがドイツに滞在していたのは、ドイツ軍の訓練や兵器開発の視察であつた。

（3）ブジョンヌイは後に「肅清」されたが、生き延びている。「騎兵派」もまたテロルの対象にされたという、ポーズだったと考えられる。

（4）逮捕された党幹部、キーロフはいずれもスターリンの「政敵」であつた。レーニンに重用された共産党幹部の内、当時国内で生き延びたのは、スターリンだけだった（トロツキーは亡命していた）。

3・後遺症

1939年9月1日、ヒトラーはついに「第三帝国」の建設に取り掛かった。ドイツ軍は7個装甲師団を含む約150万人の兵力で、「白作戦」すなわちポーランドへの侵攻を開始した。

このとき、ドイツ軍は初めて実戦で装甲部隊を投入したが、グデーリアン大將率いる第19軍団は10日間で約360キロを走破するという驚異的な快進撃を成し遂げた。自ら「電撃戦」の有効性を証明して見せたグデーリアンは、国防軍の中で確乎たる地位を掴んだのである。

一方、クレムリンは9月14日、ヒトラーに対して指定されたポーランドの地域に赤軍が侵入するであろうと伝えた。その3日後、ソ連軍は東部から大量の戦車を投入してポーランド領内に侵攻した（1）。

粛清の「後遺症」は、すでにこのとき現われていた。作戦初日こそソ連軍は目ざましい進撃を見せたものの、2日目には早くも燃料の不足が発生し、進撃の速度は急速に低下した。ビヤトリスクでドイツ軍に接触したときには、前線の部隊は燃料を緊急に空輸してもらわなくてはならなくなっていた。

そして、この「後遺症」は11月30日に開始したフィンランドとの戦争（冬戦争）において、さらに深刻な状態で全世界に露呈された。この日、レニングラード軍管区司令官メレツコフ上級大將率いるソ連軍は約60万の兵力をもってして、フィンランドに侵攻した。切迫するドイツとの戦争に備えて、フィンランドとの国境線を戦略上の要地から遠ざけることが目的であった（2）。

スターリンの忠実な部下であるヴォロシロフは「4日で片が付くだろう」と予想していたが、マンネルハイン元帥率いるフィンランド軍に何度も裏をかかれ、開戦から1ヶ月後には戦況は完全に膠着した。このときソ連軍はフィンランド軍に対し、兵員数で5倍、

戦車と航空機では30倍もの兵力と膨大な砲兵隊を抱えていた。

失態を重ねたメレツコフは解任され、代わりにティモシエンコ上級大將が北西部正面軍司令官に就任するも、戦況は必ずしも好転しなかった。その結果、翌年2月になってようやく優勢に立つことが出来た（3）。

1940年3月12日、ソ連はフィンランドと領土割譲要求を含む和平条約を締結した。しかし、そのための代償は戦果とはとても釣り合わないものだった。約5万人の戦死者に、15万人を超える負傷者。国際連盟からは脱退を命ぜられ、ソ連は外交上も孤立することになった。

予想以上の失態にスターリンは、クレムリンに赤軍の全首脳を集めて、冬戦争で露呈した戦術面・兵器面での弱点についての徹底的な検証と、それに基づく改善提案を行なわせた。だが、指揮系統を根幹から破壊された巨大な軍事組織を、机上の理論だけで立て直すことは不可能だった。

この嘆かわしいソ連軍の有様を見て、ヒトラーは大いに興奮して「ソヴィエト連邦のような腐り切った体制はいずれ崩壊する」との確信を持った。この確信が、「バルバロッサ作戦」の発動に踏み切った要因のひとつとなったのは言うまでも無い。多くの外国人や情報機関もまた、ドイツの見解に同調した。しかし、ひとつだけ違う見解も持った国があった。

日本である。

3・後遺症（後書き）

（ 1 ） 1939年8月24日、モロトフとリッベントロップは「独ソ不可侵条約」を締結した。その際、両国は「新国境線」を定める秘密協定を取り交わしていた。

（ 2 ） 当時、フィンランドとの国境はレニングラードから最も近い場所で約30キロ、北海の要港ムルマンスクに接続する鉄道からは約80キロの地点にあった。

（ 3 ） メレツコフは配下の第7軍司令官に転任した。

4・虚構の巨人

1939年代、中国への侵略を始めた日本―関東軍は満州一帯を占領し、傀儡政権を樹立した。このとき満州国政府は、モンゴルとの国境画定で紛争を抱えており、関東軍はこれを利用して「北の大国」ソ連の出兵を見極めようと画策していた。

1939年5月、関東軍は満ソ国境のハルハ河付近で一連の軍事行動を取った。クレムリンはこの行為を「日本政府には侵略の意図を有している」とみなし、日本がさらなる攻撃を仕掛けてくるだろうと予想していた。そこで、満ソ国境を管轄する第1ソヴィエト・モンゴル軍の司令官に白ロシア軍管区副司令官ジューコフ中将を任命した。

ブジョンヌイの部下であり、典型的な「騎兵閥」の一員であったジューコフはその実、トウハチエフスキーの信奉者であった。彼はグデーリアンと同様に、この機会にトウハチエフスキーの理論である「縦深作戦」の有効性をスターリンに証明してみせようと考えた。ノモンハン一帯の戦場を視察したジューコフはモスクワに部隊の増援を訴え、認められた。

8月20日、約500両の戦車で増強させた第57軍団は大量の航空機による支援を受けながら、関東軍の陣地に襲いかかった。後方地域ではトラックの輸送部隊が縦横無尽に駆け巡り、兵員や弾薬の補充を滞りなく行っていた。

各地で撃破された関東軍は2週間の内に、大きな損害を被って撤退した。9月15日、日ソ間で停戦協定が締結された。このときの敗戦によって関東軍はソ連の国力を脅威と受け取り、その勢力圏を南方へと差し向けることになる（ ）。

ジューコフはノモンハンでの功績により、「ソ連邦英雄」の称号を与えられた。その後、スターリンに認められてキエフ軍管区司令官を歴任し、1941年1月には参謀総長に就任した。そして、同

年6月22日の開戦から、ジューコフは精力的に前線の各地をめぐり、ある事実気付いたのである。

緒戦に被ったソ連軍の敗北は、その大半が肅清で生き延びた将校たちの未熟さに端を発していた。司令官たちは急きよ繰上げで陸軍大学を卒業した者ばかりで、実戦経験のない肩書きだけの彼らは戦況に応じていく自信も無く、型にはまった解決法を当てはめようとした。その結果、ドイツ軍の前進が最も予想される道に沿って兵力を集中させることもなく、まったく教科書どおりの作戦や兵の運用を行なったので、経験豊富なドイツ軍は簡単にそれを見抜いてソ連軍の攻撃を避け、反撃することが出来たのである。

さらに、どのレベルの司令部でも協同作戦や支援砲撃、兵站のための訓練を受けた参謀将校が不足していた。このような参謀将校たちは配下の部隊を掌握するための必要な連絡も、上官への戦況報告すらしなかった。いったん電話線が切断されると、多くの司令部が完全に通信不能の状態に陥った。軍管区司令部さえ、動員後は「正面軍」という大規模な組織を運用するというのに、熟達した通信士が不足していた。

このことから、赤軍は司令部の数に対して、有能な参謀将校と通信機構が圧倒的に不足していた事実が浮き彫りとなった。さらに緒戦の敗北によって、軍・軍団・師団の兵力が壊滅的に激減したため、生き残った指揮官たちはもはや司令部とは言えない体制で指揮を執る状況に追いやられてしまった。

ジューコフは3週間に及ぶドイツとの戦争から、指揮系統上の問題、さらには戦車や火炮をはじめとする兵器の全般的な不足に対処する方法として、とりあえず戦前の概念を放棄し、赤軍の組織をより基本的かつ単純なものに立ち返らせるという結論に至ったのである。

4・虚構の巨人（後書き）

（ ） 赤軍参謀本部（GPU）第4局のスパイとして日本に潜伏していたゾルゲは、モスクワ攻防戦さなかの1941年10月4日、「日本にソ連侵攻の意志なし」と本国に打電した。これを受けて、スターリンはシベリアの各軍管区にいた部隊をモスクワ前面やレニングラードへ送るよう命じたのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1446t/>

巨人たちの戦争 第1部：崩壊

2012年1月4日16時49分発行